

利尻礼文サロベツ国立公園指定前に関する資料

「利尻礼文国定公園指定及び公園計画の決定について」

の諮問に対する計画部会長の報告（昭和 40 年）

以下の文は「利尻礼文国定公園の指定及び公園計画の決定について」の諮問に対する計画部会から自然公園審議会への審議結果の報告である。

先程会長より御説明のありましたとおり「利尻礼文国定公園の指定及び公園計画の決定について」という諮問につきまして、予め6月22日に開かれました計画部会におきまして、慎重に審議いたしました結果につきましてご報告申し上げます。

利尻礼文につきましては、本年3月12日に開催されました第17回自然公園審議会におきまして国定公園の候補地として適当である旨答申いたしましたものがありますが、その後事務当局で成案をえて今回その区域及び公園計画について諮問されたものであります。

区域につきましては、利尻及び礼文の両島のうち景観上重要な地域と稚内市の西南抜海稚咲内の海岸部一体の三団地に分れ1市4町にまたがる16,703ヘクタールについて設定しており適当と認めました。

本公園は北海道の最北西部に位置するわが国の残された原始景観地域の一つでありましてこのうち利尻島は直径約一五軒のほぼ円型の島で中央部にそびえる利尻山の開析されたコニーデ型の火山景観と豊富な高山植物群落とを有し、礼文島は利尻山に近接しておりますが、地質的に異なる白亜紀層を主体として構成された南北に細長い島で、西海岸部の海蝕景観とこの一帯に貴重な寒地性の海浜植物群落を有しておりますことをそれぞれ特色としております。

また本土側抜海稚咲内一帯の海岸は砂丘とサロベツ川の流路の変遷による河跡湖を主体とする湿原景観を特色としております。

公園計画うち保護計画につきましては、景観上重要な利尻山中腹より上部、礼文島のうち礼文岳ゴロタ岬、桃岩を含む西海岸一帯、及び本土側稚咲内一帯の湿原地帯の合計5,599ヘクタール公園面積の33.5%に当たります地域を特別保護地区に計画するほか残余の地域につきましても、そのほとんどが特別地域に計画され保護がはかられることとなっており適当と認めました。

利用計画につきましては、国定公園でありますので国で決定いたしますものは、集団施設地区及び主なる道路であります。利用基地となる地点が、各島の港湾集落であります関係上、区域内に集団施設地区は計画されておられません。

道路のうち車道は、利尻登山を容易ならしめるため景観上支障のない山麓部まで計画されたもの、抜海稚咲内海岸を縦断利用するもの等五路線延長 56.5 ㌾のうち新設 41 ㌾が計画されております。また歩道は利尻岳及び礼文岳の登山のためのも四路線、延長 27.5 ㌾が計画されておりいずれも適当と認めました。

次に名称の問題につきましては、別段論議はありませんでしたが、申出の名称「利尻礼文」が適当かと存じます。

なお審議の過程におきまして、このような新たな公園の指定が利用者の急速な増加となり逆に自然の破損をまねく結果とならないよう、また既に指定管理されております自然公園全般の問題として自然の保護が適当に図られますよう検討されたい、またこれについての具体的な施策といたしましては、理地管理機構の充実、これに伴う予算措置等、事務当局において早急に措置されたい、とのご意見がありましたので申し加えます。

以上計画部会の審議の結果についてご報告申し上げます。何とぞ宜敷くご審議の程をお願いいたしたいと存じます。

利尻礼文サロベツ国立公園 公園計画書(抜粋)(昭和 49 年9月 20 日)

第1 公園区域

1 区域設定の基本方針

本公園は、北海道の西北部の利尻、礼文両島と抜海、稚咲内の海岸部及びサロベツ原野にわたる地域で、利尻島の火山景観、礼文島の海食景観、抜海稚咲内、サロベツ原野の湿原、沼沢及び砂丘景観と全域にわたる北方植物景観に特色がある。

したがって、これらを包含し、今後とも保護することが適当である地域を公園区画として設定する。

第2 公園計画

1 基本方針

(1) 現況及び特性

本公園は、北海道の最北部、稚内の西方約 40 軒の海上にある我が国最北端の離島、利尻及び礼文両島と稚内側、抜海、稚咲内海岸及びサロベツ原野の一部の主要景観地域に区域設定されている。

各地域の主要な自然景観は次のとおりである。

- 利尻島——利尻山の火山地形、山麓部の側火山群、海岸部の海食崖
- 礼文島——西海岸の海食崖、礼文岳の北方系の高山植物群落
- 抜海・稚咲内海岸——砂丘及び低湿地、湖沼を含む砂丘林
- サロベツ原野——標識的な泥炭分布（高位、中位、低位）及び泥炭地植生とペンケ沼、パンケ沼の湿原

ア 地形・地質

利尻島は単一の火山島で、直径約 15 軒の円形を呈し、その中央に標高 1,718 m の利尻山がそびえ四方に広く裾野をひいている。

その基底は新第三紀層から構成されているが、大半は利尻山の主体をなす安山岩、火山碎屑物等で覆われている。

利尻山は開析の進んだコニーデ型火山で中腹以上は放射状の谷が刻み込まれ、特に頂上南西方は峻嶒な尾根が発達し、優れた景観を呈している。

また山腹から山麓にかけては、ほぼ南北方向にポン山、姫沼、オタトマリ沼など比較的新しい多数の側火山がある。

礼文島は、利尻島の北方、数軒の海上にあるが利尻島とは地質構成を異にするため、全く対照的な景観を示している。

すなわち、礼文島は主として白亜紀層からなり、一部に新第三紀層及びこれらを貫く火成岩類がみられる。

白亜紀層は南北性の断層や褶曲をうけているため、島は全体として南北に細長く、西海岸では、急峻な海食崖となっており、島の最高峰礼文岳は標高 490 m にすぎず、全般的に丘陵性の扁平な地貌を示している。

火成岩の浸食に強い部分は桃岩の奇勝や、海馬島、スコトン岬などをつくっている。

抜海、稚咲内海岸は、日本海に面して帯状に沖積層の砂丘が発達し、その背後に新第三紀層の丘陵が迫っている。

この砂丘は海岸線に並行に数列が継続しており、砂丘と砂丘の間には、湿地や沼地が点在して

いる。

特に稚咲内附近では条状に幅 50～200m 長さ 1～3Km の沼沢が細長くかつ多く断続し特異な景観を示している。

これはサロベツ川の流路の変遷と砂丘の風食作用によって形成されたものと思われる。

サロベツ原野は、サロベツ川とその支流のエベコロベツ川の流域に形成された日本における低地の代表的な泥炭地である。

原野が盆地化したのは、第三紀から第四紀初頭にかけてであるが、周辺山地から砂礫が流入し、堆積盆地は埋積されながら沈降し、その後洪積性ウルム氷期後、海水面の上昇により海水の進入が始まり、沖積世に入って海進が促進され、7,000～6,000年前には大きな潟湖が形成された。

この水面は河川により、埋積され、海退にともない陸地化し、泥炭層の形成が行われ現在のサロベツ原野が形成されたと考えられている。

イ 地紋

利尻山は単体火山としては、北海道内で最も高山植物に富み、標高約 1,000m 以下では随所に壮麗なお花畑を構成している。

また、リシリヒナケシ、リシリミミナグサ、リシリブシなど日本ではこのみに生息する植物も多く、植物の分布上学的にも重要地帯である。

山麓部森林の大半は、山火事などによる二次的植生を呈しているが一部にはトドマツを主とした針葉樹林がみられる。

礼文島は標高が低いにもかかわらず西海岸の断崖を中心にお花畑が発達し、レブンウスユキ、レブンソウ、レブンアツモリ、フタナミソウなど貴重な種類が多く北方系の高山植物群落としては我が国でも特筆すべきもので、桃岩附近一体は道天然記念物として指定されている。

抜海、稚咲内海岸は、汀線に近い砂丘面にはハマニンニク、シロヨモギ、ハマナス、カワラナデシコなどが混成し、低湿地帯にはタチギボシ、エゾカンゾウ、シロワレモコウ、ミツガシワなどがみられる。

稚咲内附近の砂丘では、海より第3列の砂丘に典型的なモンゴリナラ、カシワの風衝林が発達しており、つづいてトドマツ、エゾイタヤ、ナナカマドなどの針広混交林が生息し、優れた景観を構成している。

サロベツ原野は、標識的な低位、中位、高位の泥炭層の分布と、それに伴う他に例をみない大規模な泥炭地植生がみられる。

特に高位泥炭地でナガバノモウセンゴケを産することは注目に値する。

各泥炭層の分布と対応する植生は、高位泥炭地ではオオイヌノハナヒゲ、ミカズキグサ、ホロムイソウ、ガンコウラン、ホロムイツツジ、ツルコケモモ、ヒメシヤクナゲ、中間泥炭地では、エゾカンゾウ、ワタスゲ、ヤチヤナギ、ヒオウギアヤメ、ヤマドリゼンマイ、低位泥炭地ではヨシ、イワノガリヤス等が代表的な種類である。

ウ 特殊景観

利尻山の高山植物群落、姫沼、オタトマリ沼、**礼文島**の海食崖、寒地性高山植物群落、及び**抜海稚咲内海岸**、**サロベツ原野**の砂丘林、泥炭地植生、湖沼、湿原景観などがあげられる。

動物相としては、**利尻**、**礼文両島**とも特筆すべきほ乳類は生息せずシマリスや鳴きん類が多く、中でもコマドリ、ウグイス、マヒワ、オオルリ、アカハラ、クロツグミなどの野鳥がよく繁殖している。

また**抜海**、**稚咲内海岸**、及び**サロベツ原野**は、原野、水辺の野生鳥類の繁殖、渡り鳥の要衝地として、利尻、礼文両島とともに鳥獣保護区に指定されている。

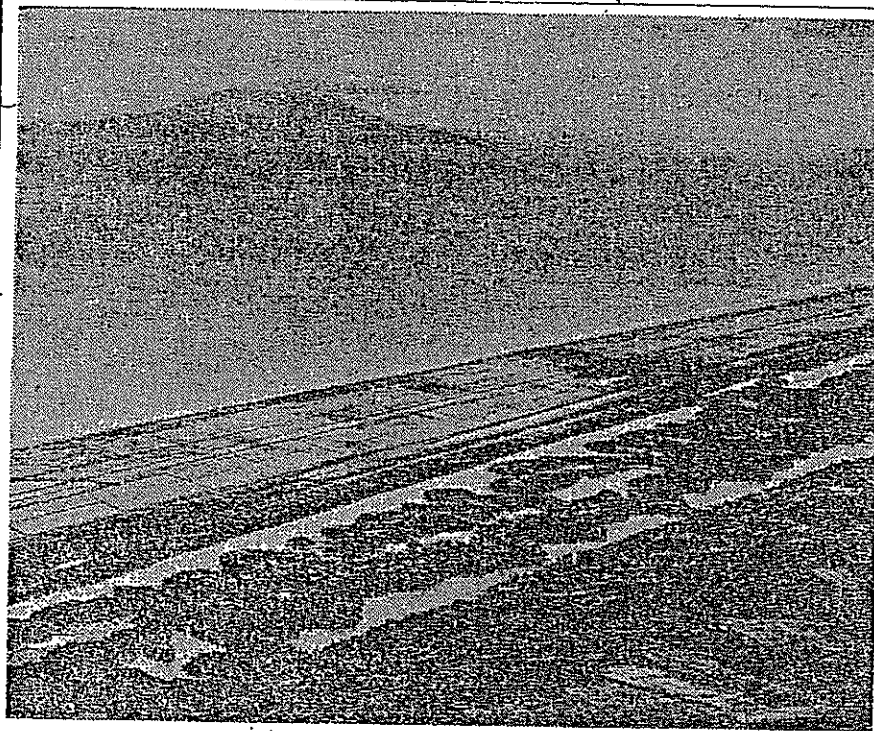
特にサロベツ原野ではカラフトから大陸に分布しているコモチカナヘビが確認されている。

利尻礼文サロベツ国立公園指定前の評価(文献)

		全体	植物	動物
道立公園 (1956.10) (観光北海道社)	利尻	日本最北の島であり、鯨と昆布の島として知られている利尻、礼文両島は何れも日本海上は横わる火山島で、前者は雄大華麗な利尻富士を中心とし、珍奇な高山植物を以て有名であり、島中の姫沼は針広混交林に囲まれ、無類の幽邃な静寂境を現出し、利尻富士の倒影を写し出して、その神秘的な情趣に観光客をして思わず驚異の目を見張らしめるものがある。後者は(中略)全島丘陵で、西岸の断崖地帯に生息する高山植物は利尻島と並び称されている。(中略)利尻富士は、截頭円錐形の死火山で端麗な富士型をなし、これを遠くをへだてて稚内方面から望むと本物の富士が海上に浮かんでいるかの感がある。	利尻岳は一山一島を成しているが、旧くよりその上部は高山植物の名産地として知られている。事実単体火山として北海道中最も高山植物に富み、壮麗なお花畑を構成している。同島固有の植物を有し、また珍奇種を有し、植物分類学上の問題を包含して、植物学上北日本に於ける屈指の重要地点である。	礼文、利尻の両島は動物の上では大体似寄った島である。この島のよいことは、何処を歩いても恐ろしいクマがいないことで、安心して露営ができるし、山の中の一人歩きも恐ろしくない。その上に嫌らしいヘビが全然いないことが特長である。(中略)利尻にも、礼文にも北海道からネズミ退治のためにイタチを入れた。昭和八年から十年の間であったが、それが島の生活に適したものと見え今では相当に殖えている。(中略)両島で有名なのは小鳥が多いことで、特に鳴禽が多くリシリコマは愛鳥家の間には昔から知られている。
	礼文		礼文を代表し、礼文の植物景觀に最も異彩を与えつつあるものは、礼文西部断崖線に添えるお花畑であろう。しかしメシクニ附近より北部及び島の南部は山火のために林地もお花畑も荒廃しており、桃岩とウエンナイ附近が代表である。	
利尻・礼文島の風景・気候・動物・考古 (1962.4) (利礼国定公園期成促進会)	利尻	利尻・礼文両島は北海道の北西端にある日本最北の島嶼生活圏であるとともに、すぐれた自然の風景地である。(中略)両島の自然は、沿岸地帯の一部をのぞけば、いちじるしい破壊をまぬかれ、本来の自然のすがたがそのままのこっているところも少なくない。	利尻山のお花畑は、1,000m附近から所々に展開する。種類にとみ特有のものも多く、豪快な山体と比類ない脚下の眺めに映え、極めて壮麗である。	利尻・礼文の両島は、北海道の一部ではあるが、動物は北海道本島と同一ではない。離島的な特徴を充分にもっていて、森林があるのにクマの棲息をみないし、北海道本島には爬虫類のヘビ、トカゲなどの種類も相当に多いのに反して、ここにはそれらが棲息していないことは学術的にも興味のあることである。もちろんどこを歩いても動物による危害の憂いはまったくなく、このことも島の観光的価値を高めるものである。その一方野鳥は極めて豊富で、その観察などには好適の地であり、初夏の野鳥の繁殖には、恵まれた自然環境とともに自然の楽天地を現出されるのである。
	礼文	両島の自然風景は、利尻島そのものが直接海を抜く1,718mの円錐火山として非常に美しいばかりでなく、礼文島にもまた固有のすぐれたものがあり、また島内の自然風景のほかに島をめぐる海上のすぐれた眺めがあり、さらにまた、日本最北の島嶼生活圏としての地理的位置が、その自然風景に大きい興味を呼んでいることも、ぜひ考えにいらておきたい。	礼文島の植物景觀としてもっとも目を引くものは、南部の桃岩附近からはじまり、西海岸の海蝕崖に沿い、遠く北上する一帯のお花畑である。一部分は山火の被害をうけているが、大部分は自然のままの状態で、短い夏を追うようにして花ひらく。山と海の展望、絶壁と岩礁、このお花畑の美しさは利尻山のお花畑とともに特に保護されなければならない。	
利尻・礼文・サロベツの自然 (1974.1) (北海道)	利尻	利尻山は方向を問わず、海陸何所より見ても誠に見事であるが、特に美しい全貌を一目に収め得られる点においては、遠くしては宗谷本線抜海附近、近くしては礼文島香深附近よりの眺めが最も優れたものとされている。(中略)一度その最高点に達すれば、足下に展開する広い裾野と島を取り巻く海を距てて、礼文島更に遠い北海道本土の山々をも一望の内におさめる事が出来て、その雄大な景觀は誠に絶賛に値するものがある。	本島は海中に孤立した火山島で植物相中、森林相の垂直分布的变化には興味深いものがある。(中略)利尻山のお花畑構成要素は南方鬼脇面よりも、北方鷺泊面において要素が多く、かつお花畑も良好な発達をなしている。	同上(上記文献を引用)
	礼文	島内中央にある最高地点をなす礼文岳附近を除いては中央部より南部にかけて大体200m～300mの山地が続きこれ等の間に殆ど平地は見られず、特に西側は急斜する海蝕崖をなして海に臨んでいる。	礼文島の森林はトドマツ林、ダケカンバ林およびナガハヤナギ林の三林から成っている。(中略)礼文島山岳地帯の植物として最も注目すべきものはハイマツである。	

利尻礼文サロベツ国立公園

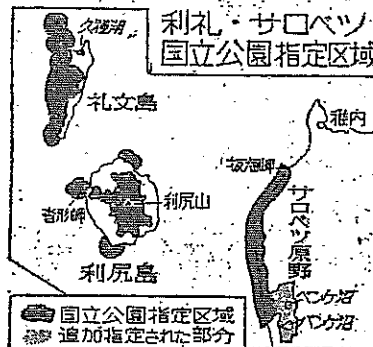
道内
5番目



日本最北端の国立公園の景観—サロベツ原野から利尻、礼文を望む

来月中旬に“うぶ声”

審議会が答申



北海道に新しい国立公園、利尻礼文サロベツが誕生。環境庁長官の指図機関、自然環境保全審議会自然公園部会（林修三郎会長）は三十日、利尻・礼文国立公園に、対馬のサロベツ原野の一部を加えて国立公園に昇格させるという三利閣府長官に答申した。同府は八月中旬に遊歩道の整備を入れ「利尻礼文サロベツ国立公園」の名称で審議会に答申し、上院に提出する。国立公園としては二十七番目、道内では五つ目だが、現在全国に指定候補地がなごころが

の面を占める。最後の国立公園にふさわしいといっている。
利尻・礼文は四十年七月、国立公園として指定され、その後四十六年に同審議会が対馬の家来館内、豊後町、豊後管内焼畑跡にまたがるサロベツ原野を含めて国立公園に昇格させるのが適当と認めた。道内五つの国立公園として、その環境に期待が寄せられていた。しかし、公園に組み込まれることになったサロベツ原野は約一万七千の範囲をめぐって「自然保護の、農業開発など、環境保全と遊歩道開設など、とりあえず約四千を公園に組み込み、同原野の南側、焼畑跡の約千六百をめぐって、指定遊歩道（約千二百）を追加指定する」という案をもちだして決着がつけられ、答申もそれに沿った内容であった。その一部部会では、付帯意見として、サロベツの遊歩道を十分に維持する、保護地域をできるだけ早く公園に加入する、林部会長の遊歩道現案（二十四日）に添った遊歩道の公園の名称を利尻礼文サロベツ「サロベツ」も入れてほしいと要望があった。この二つの追加案が、道内一の三利閣府に提出される。同府は、この付帯意見を十分に尊重、考慮したうえで「利尻礼文サロベツ国立公園」と呼称す

る。同公園は稚内市、宗谷管内豊後町、礼文町、利尻町、渡利町、留萌管内焼畑跡にまたがる面積約二万七千七百六十坪、平均一キロの海岸線、利尻・礼文両島を中心とした日本最北端の国立公園である。
利尻島は稚内市の西約四十キロの海上、直徑十五キロの火山島で、その中に利尻山（標高一七二八メートル）と、その西を望むといふ。頂上の周囲は峻い崖が続き、海岸には海食崖（かいしき）が見える。高山植物が多くオオシキンバヤ、ホリバナ、ニンジンソウなど日本固有の植物もみられる。利尻島は利尻島から北へ数キロ、西海岸には海食崖がある。利尻には比へ全体に女性的な景観。島内にはトウモロコシ、ウマノヅナ、ソウなど北方系の高山植物の群生がある。
渡利島の海岸線は、利尻島から約四十キロの海上にあり、同島の西側にあり、その間に利尻山（標高一七二八メートル）と、その西を望むといふ。頂上の周囲は峻い崖が続き、海岸には海食崖（かいしき）が見える。高山植物が多くオオシキンバヤ、ホリバナ、ニンジンソウなど日本固有の植物もみられる。利尻島は利尻島から北へ数キロ、西海岸には海食崖がある。利尻には比へ全体に女性的な景観。島内にはトウモロコシ、ウマノヅナ、ソウなど北方系の高山植物の群生がある。

残された最後 の自然美

目に進む日本の自然
破壊、自然美にあふれる北
海道もまた、その例にまれ
ない。そんななかで、日本
の最北端、利尻と礼文、そ
してサロベツはわが国に残
された最後の自然景観であ
れた地域である。

その国立公園昇格指定は
この地方に住む人々にとっ
て、ながいあいだの宿願で
あった。年々ふるふる観
光客からも、この自然美を
国立公園として永遠に保護
すべきという声もまた、
日まじに強くなっていた。

これまでの国立公園だっ
た利尻礼文に加え、広大な
海岸と自然のお花畑サロベ
ツを加えての「利尻礼文サ
ロベツ国立公園」である。

全国で二十七番目の国立公
園。それはまた、日本でこ
れが最後の国立公園になる
のではないかとさえいわれ
ている。

内容は、一口にいえば自
然美が特徴である。その
四季の変化に富んだ荘厳さ
は、単に公園と呼ぶには
あまりにも軽々しきさへ
おぼえるほど。その景観は
北オホーツク道立自然公園
とあわせ、国民保護の地、
学術面でも全国民の脚光
をあびようとしているので
ある。

関係六市町の 運動表現

北の海に浮かぶ夫婦島。
雄々しさを誇るものの利尻
島。しずかに寄りそう礼文
島。その景観のすばらしさ
は、古くから多くの人々に
知られてきた。それが戦後
やっと世相が落ちつきを
もつた二十五年、道立自
然公園に指定された。そのこ
ろからすでに、この両島の
景観、百花りようの高山
植物群などは、高く評価さ
れ、国立公園指定にむか
うと、喜びにわいた記憶
も新しい。

国立公園に指定されてか
ら十五年、稚内市はじめ
利尻三町、そして宗谷観光
連盟が猛運動のすえ、四十
年には国立公園利尻礼文が
誕生した。この指定に先が
けて現地視察に訪れた公園
審議委員の一行は、当時か
ら「国立公園の価値がある
」と、認めて
いたという。

その根拠は、まったく荒さ
の最北端、利尻と礼文、そ
してサロベツはわが国に残
された最後の自然景観であ
れた地域である。

その国立公園昇格指定は
この地方に住む人々にとっ
て、ながいあいだの宿願で
あった。年々ふるふる観
光客からも、この自然美を
国立公園として永遠に保護
すべきという声もまた、
日まじに強くなっていた。

これまでの国立公園だっ
た利尻礼文に加え、広大な
海岸と自然のお花畑サロベ
ツを加えての「利尻礼文サ
ロベツ国立公園」である。

全国で二十七番目の国立公
園。それはまた、日本でこ
れが最後の国立公園になる
のではないかとさえいわれ
ている。

内容は、一口にいえば自
然美が特徴である。その
四季の変化に富んだ荘厳さ
は、単に公園と呼ぶには
あまりにも軽々しきさへ
おぼえるほど。その景観は
北オホーツク道立自然公園
とあわせ、国民保護の地、
学術面でも全国民の脚光
をあびようとしているので
ある。

永年の宿願みのる

… 日本最果ての国立公園 …

自然保護が今 後の課題

それと同時に、国立指定
運動が燃えはじめた。利尻
礼文ばかりでなく、サロベ
ツも含めた国立公園への昇
格。世論も高まり、サロ
ベツの海岸保護とあわせ、
厚生省、環境庁なども本格
的に動き出した。だが、サ
ロベツ原野では、農用地開
発と自然保護
という相容れ
ない問題に直
面。これが一
つの障害にな
った。この調
整問題がなけ
れば、もう一
と足早やく園
立昇格が実現
していたら
しう。という関
係者の意見も
ある。

開発を主張
する農業者、
関係町、自然
保護と国立公
園昇格をめざ
す稚内市を
はじめとする
利尻、礼文、
東礼文、東
礼尻、東礼
尻、東礼尻
の諸市町村
は、開港局
環境庁との関
係者による調
整問題が、つ
い最近まで続
けられてい
た。その調整
もやつと円満
解決。今年に
入って宿願実現へ大きく
み出したのである。

今度指定になった公園区
域は、樺越町豊富町にまた
がる一部を残したサロベ
ツ原野、豊富町稚内から
稚内市沿岸の海岸線一帯を
含めた海岸線。それに公園
の目玉商品ともいえる
き利尻町、東利尻町、礼文
町の一市五町に及ぶ広大な
地域である。

この国立昇格が実現した
いま、関係者の願いは急増
する観光客による、豊かな
自然景観の破壊からの保護
である。東日本海フェリー
の資料によると四十六年
は二十万人に集った利尻
観光客は、昨年二十六万人
を数えた。さらにこれは
すでにそれを上回るといつ
た状態。また稚内観光協会
調べでは、昨年稚内を訪れ
た人は六十二万人。こし
は七十万人が予測されるほ

光が定着しはじめたのもこ
のころからである。ヒッチ
ハイク、自転車旅行者も年
々多くなった。ついに四十
三年には十万人を突破。関
係者だけの関心だった観光
産業も、地域の一般住民に
まで深く理解されはじめた
のである。

また保護と併行して、い
かに過年観光にもつてゆく
かの方策も考えなければなら
ない。交通の問題、受入
れる宿舎の問題、訪れる人
たちを親切に迎える意識の
高揚、地域の特色を生かし
た観光みやげ品の開発とい
ったものもある。国立公園
実現を機に、関係者のえい
知を集め、これらの解決に
あたるべきでもある。

また保護と併行して、い
かに過年観光にもつてゆく
かの方策も考えなければなら
ない。交通の問題、受入
れる宿舎の問題、訪れる人
たちを親切に迎える意識の
高揚、地域の特色を生かし
た観光みやげ品の開発とい
ったものもある。国立公園
実現を機に、関係者のえい
知を集め、これらの解決に
あたるべきでもある。

フェリーの受 入れは万全

利尻礼文への交通機関と
いえば稚内・利尻の連絡船
と飛行機である。そのうち
利尻航路は、観光客の増加
とともに万全の受入れを進
めている。

去る四十一年の七万五千人
程度のころまでは、中型貨
客船だった。それが四十三
年に十万人台になった。こ
から二百五十トンの鋼船利尻
丸など五隻になった。それ
だけでは急増する観光と離
島観光にはつてゆかず、
四十七年四月大型カーフェ
リー第一宗谷丸(五三三
ト)が就航。いわば本格的な
利尻観光の幕開けの印象さ
え与えた。

さらに四十六年二十一万
七千人になるにおよんだが
この年には小型フェリー大
礼丸も加わった。大車輪の
輪船にあたる。それでは
なお半分とはいえず、四十
七年に千ト型フェリー第一
宗谷丸が就航させ、二十四
万人の観光客を輸送した。
この間十年、当時につら
べて観光客は六倍という驚
異的な伸びである。

千トン級一隻
ふやす
稚内市が利尻礼文サロベ
ツ国立公園の中心地である
なら、さしずめ稚内港北埠
頭は利尻観光の表玄関であ
る。その体制にあわせて
しくするため、東日本海フ
ェリーは北埠頭の建設に際
して、第一期工事は明年六月
完成をめざす。工費約二億
円で鉄筋二階建て、一階待合
ロビー、二階食堂や事務
室、三階倉庫室や役員室。
その北側の前には、利尻
礼文へ渡る大駐車場。乗
用車なら五百台を収容す
る幅員がある。さらに、明
年以降の観光客入込みを見
込んで、千トン級カーフェ
リー一隻を増やすなど、一
層の体制充実を著々と進め
ている。

また保護と併行して、い
かに過年観光にもつてゆく
かの方策も考えなければなら
ない。交通の問題、受入
れる宿舎の問題、訪れる人
たちを親切に迎える意識の
高揚、地域の特色を生かし
た観光みやげ品の開発とい
ったものもある。国立公園
実現を機に、関係者のえい
知を集め、これらの解決に
あたるべきでもある。